

「同化」から「異化」へ：エスニシティ研究におけるパラダイムの転換をめぐって

江淵，一公
広島大学

<https://doi.org/10.15017/2235379>

出版情報：九州人類学会報. 16, pp.4-12, 1988-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



「同化」から「異化」へ

— エスニシティ研究におけるパラダイムの転換をめぐる —

江 淵 一 公

1 はじめに

私は1960年代の初頭からずっと、北米における移民集団の「エスニシティ」の文化人類学的研究を主題としつつ、これまでに、黒人、ポーランド人、日系人、ウクライナ人などの諸民族のコミュニティの民族誌的調査を手掛けてきたが、その過程で感じたこと、関心を持ったことの一端を述べてみたい。

「エスニシティ」は、古くて新しい問題である。歴史的に、異なる文化を持つ集団の出会いは、葛藤や差別や融合など、さまざまな形の「エスニシティ」の問題を惹起してきた。最近のエスニシティをめぐる動きが新しい環境現実の変化（都市化・国際化と多数の民族の遭遇）を反映していることは疑いない。しかし、「民族の出会い」(ethnic encounter)という現象そのものは何も最近新たに生じた問題ではない。それにもかかわらず、それがあたかも「最近の出来事」であるかのように扱われるのはなぜであろうか。

これまでの私の一貫した関心は「エスニシティの恒常的生成過程」にあった。エスニシティの恒常的生成過程とは、エスニシティというものは歴史的な産物であり、その中身は一般に信じられているほど伝統にのみ規定される不変的なものではなく、時代の環境的条件との相互作用の中で絶えず新しい要素を取り込みながら自己更新を遂げて行くきわめてダイナミックな過程であるという意味である。したがって、それは伝統の「持続」と「変容」の両面を常に併せ持っている。

ところで、過去50年ほどのアメリカにおけるエスニシティ研究の動向を振り返ってみるとき、そこには明らかに研究のパラダイムの転換が見て取れる。それは端的に言えば、民族文化の変容と持続に関する多数者集団の対応の仕方の変化を反映したものである。1930年代には、文化人類学では、「文化変容論」(acculturation)が大きな関心を呼んでいた。政治的、経済的、軍事的に強い背景を持つ「強い文化」とそうしたものを持たない「弱い文化」とが接触したときには、後者に致命的な変化が起こることが多い。西洋文化と接触して急速に伝統を失ったアメリカ原住民文化や太平洋諸島文化の例のみならず、アメリカ大陸に遅れてやってきた移民にも多かれ少なかれ同様のことが起こった。これらの弱小諸民族のエスニシティの中核を構成する伝統文化の動揺、衰退、果ては消失の過程（それは、別の角度からいえば、強い文化への「同化」過程であった）を「文化変容」と呼び、その側面に焦点を合わせて捉えようとする研究がかつては非常に盛んであったが、最近では、逆に「持続」の側面に注目した研究が増えている。民族の「持続」の面に視点をすえるとき、「文化変容」ではなく、「エスニシティ」論が前面に出てくることになる。私の見るところでは、文化変容論もエスニシティ論も、結局は同じエスニシティを扱っているのだが、ただ変容と持続のいずれの側面を強調するかによって、違った捉え方になってしまうのである。

このようにして最近クローズアップされてきたエスニシティ論であるが、しかし、その研究の現状はかなり混迷している。ここではそのすべてについて述べる余裕はないので、私自身が経験したことを中心に若干取り上げてみたい。

アメリカのエスニシティ現象に関心を持ち、こうした問題を考えている過程で、私は、二つの大きなパラダイムの転換に遭遇した。一つは、アメリカにおける国民的統合の理論と関わる人種・民族関係へのアプローチが、同化・融合主義から多元主義へと大転換を遂げたことであり、もう一つは、文化人類学のエスニシティ研究の分野で、生物的特質、言語、文化の3者の一致を基準にしたエスニシティの古典的定義を拒否する「ニュー・エスニシティ」という概念が生まれ、また、集団論を基礎にした従来の社会学におけるエスニシティ概念とは異なる研究視座が提供されたことである（「ニュー・エスニシティ」については、別の機会に論じたことがあるので、それらをご参照願いたい……江淵1985a, b）。これらの出来事との遭遇は、私にいろいろな問題への関心をかき立てさせたが、その一つに、「エスニシティの潜在化と顕在化」という現象、ないしその条件をめぐる問題があった。

2 “エスニック・リバイバル” —エスニシティの潜在化と顕在化

1970年代以降、文化人類学のみならず、社会諸科学のいろいろな文脈で「エスニック・リバイバル」(ethnic revival)と呼ばれる現象が注目されている。しかし、それについては、私はいろいろな疑問をもっている。いま、「エスニシティ」をめぐるある種の動きがあることは事実であるが、しかし、それは果して「民族の復活」なのかどうか。これは、「復活」をどう定義するかにもよるが、本当のところは、消えていたものが復活したのではなくて、「消えた」と認識されていたことに誤りがあったというようなことはないであろうか。また、もし「復活」が事実であるとするならば、なぜ復活したのであろうか。

従来のエスニシティ研究（とくにアメリカ社会学における）は、エスニシティを常に集団論及び社会生態学の視角から論じてきたといえる。いわゆる構造・機能分析の手法がその主たる武器であったところが、近年のエスニシティは多元化しており、集団論だけでは説明困難になっている。アメリカのチャイナタウンのように、同一民族が凝集してコミュニティを形成している場合は、集団論的エスニシティ概念で捉えることもできようが、そうでない場合も多い。

アメリカでは、移民は一般に、移住当初のころは、貧困、言葉の不自由、先住民による偏見と差別など、ほとんど同じ境遇・条件の下におかれるため、同じ地区に肩を寄せ合うようにして住み、その結果、同質的な民族街を形成する傾向がある。しかし、適応が進むにしたがって経済力・政治力の差が生まれ、階層的分化が発達する。それと共に、「分相応の居場所」(niche)を求めての居住地の移動が始まる。世代が重なればその動きはさらに加速される。かつて「凝集」していた民族成員の「散逸」は、景観的に民族街の境界を曖昧にし、「民族コミュニティの消失」を印象づけることになる。人種的特徴が多数者集団に近似し、しかも柔軟性・適応性に富む民族ほど「消えた」という印象を強く与える。アメリカ社会学の泰斗タルコット・パーソンズでさえ、アメリカ社会では民族はいずれ消えると予測していた。彼も集団論的、社会生態学的エスニシティ概念に依拠していたからである。

しかし、「コミュニティの消失」がかならずしも「エスニシティの消失」を意味するとは限らない。ある民族集団が凝集した住宅地としては境界が曖昧になっても、民族的アイデンティティの物的象徴

である民族教会や結社や商店が残る場合は多い。仮にそれらが消えたような場合にも、(民族的凝集力・結束力の弱化は争えないにしても) かならずしも「アイデンティティ」までが消え去ったとは断言できない。アメリカインディアンの一部の例に見るように、本当に消失したとしか思えない場合もあるが、しかし、実際には民族が完全に消失してしまったわけではなく、各地に散逸し、居住形態の上では凝集性を失っても、集団成員間のコミュニケーション・ネットワークは依然持続していて、アイデンティティが保持されているという場合が少なくない。これは、「エスニシティの消失」というより「エスニシティの潜在化」である。

ところが、日ごろは関係者の間でしかその存在が知られていなかったそういう集団が、何かをきっかけにして突如部外者の目にもそれと分かるような形で姿を現し、人々にその集団の存在を知らせることがある。そうした「エスニシティの顕在化」が一般に「エスニック・リバイバル」(民族の復活)の印象を与えるのかと思われる。

それはともかく、エスニシティの「潜在化」はなぜ起こるのか。また、かくれていたエスニシティを「顕在化」させるきっかけは何か。そうした問題を追究することが今日の多元化したエスニシティの研究の課題となってくる。

3 複合社会における同化と異化

アメリカにおけるエスニシティ研究は、1920年代から、主として社会学者の手で進められてきた。パーク(Park, R. E., 1926)やワース(Wirth, L., 1928)らのいわゆる人種関係周期説(race relations cycle)や、ウォーナー(William Loyd Warner)によって代表される機能主義理論(シカゴ学派)の研究がよく知られている。1920-40年代のこれらの研究に共通する特色は、いわゆる「同化主義」(assimilationism)ないしは「融合主義」(amalgamationism)の立場からの同化理論が一貫してベースにあったことである。

ところが、この同化主義・融合主義の立場に立つエスニシティ(消失)論は、「メルティング・ポット」の代表選手ともいべきニューヨークの「溶け合っていない諸民族の実態」を明らかにしたグレイザーとモイニハン(Grazer, N. and Moynihan, P., 1963)の『坩堝を超えて』(Beyond the Melting Pot)やゴードン(Gordon, M., 1964)の『アメリカ社会の同化(の実態)』(Assimilation in American Life)等の著作の出現によってその論拠が怪しくなった。そうした実態をふまえつつ、少数民族の立場からなぜ溶け合えないかを論じたノヴァク(Novak, M., 1971)の『溶け合えない民族の擡頭』(The Rise of the Unmeltable Ethnics)が出版されたころ、アメリカの思想界・言論界では、にわかに「同化主義・融合主義」に代わる「文化的多元主義」の声が高まってきたのである。これは潜在化していたエスニシティが顕在化した現象であると見ることもできよう。

「同化・融合主義」から「文化的多元主義」へと、アメリカの「統合理論」が変わって行くと共に、それを反映した形で、実態の方も、その「多元性」の側面がクローズアップされるようになってきた。そして、「同化の神話性」が強調されるようになった。

私の調査経験からいっても、たしかに多元性の実態が指摘される。しかし、同時に諸民族の間にかんがりの程度の同化が進んでいるのも動かし難い事実であり、同化をまったくの神話だと片付ける主張

は誇張としか思えない。共通する部分と異なる部分の両方が存在する。また、同化の捉え方も問題である。ゴードンも指摘するように、同じく同化といっても、行動様式のレベルの同化（文化的同化）と社会構造への統合のレベルの同化（構造的同化）とは異なるペースで進み、前者は進んでも後者はなかなか進まないという問題がある。

複合社会（多民族社会）における同化の実態はまた、その社会における当該民族集団のおかれた立場・地位によっても非常に異なる点がある。ジョン・オグブは、その「少数民族類型論」において、少数民族を、①自治的少数民族（autonomous minority）、②移民的少数民族（immigrant minority）、及び③カースト的少数民族（caste minority）の三つに類型化し、自治的少数民族（例、北米のアミッシュ）は、かならずしも同化を望まず、支配体制の枠外にあって、他の諸集団と共生的関係を保とうとすること、移民的少数民族（例、ヨーロッパからの北米移民）は、初めのうちは体制の枠外にあるが次第に枠内へ入って行く、つまり同化される傾向があること、カースト的少数民族（例、アメリカ黒人）は、反対に体制の枠内にあるにもかかわらず、支配的民族から同化を許されず前者に対して距離を保ち奉仕的立場に留まることを強要されることなどを明らかにしている。

このオグブの説に沿って考えると、これまで、同化を進めてきた、あるいは、同化を欲しながらもそれを阻止されてきた②と③の諸民族が、最近（1970年代以降）では、同化とは逆の方向、つまり「異化」を志向するようになったということになる。一般に、新参であるとか、以前奴隷であったとか、いわれなき理由で偏見をもって扱われてきたとか、スティグマに満ちた立場におかれた少数民族がスティグマから逃れる方法としては、①支配的文化への永久的あるいは一時的パッシング（越境潜入＝変身）、②〈表文化〉としては支配的民族の文化に従いつつ、〈裏文化〉として少数民族文化の保持を試みる、③ある種の開き直りともいえるような、出自を隠さず、むしろ政治的結束によって自己顕示・自己主張をはかる、といった3つの方法が観察される。最近の民族集団の動きが「民族の復活」の印象をすら与えるのは、③の動きが目立ってきたことによるものであろう。

アメリカにおける同化・融合主義から多元主義への転換は、ある意味では、きわめて“劇的”な情況の中で起こった。1960年代後半から70年代初頭にかけて私の研究対象であった黒人の間で、都市暴動を含むきわめて戦闘的、急進的な解放運動の急展開が見られたが、それはこれまで無視され続けてきた黒人の政治的“自己主張”の表現であるといわれた。この動きを受けて、いくつかの立法措置が講じられ、黒人に対するさまざまな特別便益の供与（Affirmative Action Program）と福祉政策が実行された。

この歴史的な転換はアメリカ社会の諸側面にさまざまなインパクトを与えた。とりわけ、その展開があまりにラディカルであったことも手伝ってか、被差別的境遇におかれてきたと考える、東欧系・南欧系白人等を含む他の少数民族からは“逆差別”との強い反発を招いた。それが誘因となって、それらの諸民族の間でも政治的組織化が進み、政治的経済的利権をめぐる民族集団間競争の状況が生まれるとともに、他方では、世代の進行とともに衰退の観のあった民族文化の活性化運動が展開するという事態が出現した。つまり、これまででは同化（エスニシティの潜在化）を進めてきた人々が、異化（エスニシティの顕在化）の方向へ歩みを変えたというわけである。このような状況は、限られた資源をめぐる「民族相克」の様相を呈するものであったため、相克を「統合」ないし「調和」へ止揚させる論理が探求された。その結果、これまでアメリカ社会の統合の理念とされてきた同化・融合主義（「坩堝」論）に代わって、主流文化へ

の同化を強制するのではなくしに多様な民族の文化の差異を承認し尊重する思想としての「文化的多元主義」(cultural pluralism)が新たに登場し、急速に受け入れられて行ったのである。

この多元主義は、同化・融合主義とは言葉の論理としては確かに対立するが、しかし、これはあくまで“標語”上のことであって、実際には、学校教育、マスメディアの共有、そして日々の相互作用などにより、ある程度の同化は進んで行く。同化主義・融合主義は明らかに、同化による諸民族の統合(従って、それは異質性の消失を標榜するものといえる)を希求している。それに対し、文化的多元主義・多文化主義は、異質性の保持を希求するものである。ところが、多元主義は一見したところ、同化と対立するよう見えるものの、実はそれが依って立つ基盤は基本的・構造的に同化主義と同じである。「多様の中の統一」(Unity in Diversity)という多元主義の標語が物語るように、多元主義は、社会的統合の基礎的部分における同化主義の上に成り立つもので、「同化しつつ異化する」統合の形態(構造的に、同質性をベースにしつつ、その上に、それを犯さない程度の異質性を許容する体制)とでも呼べるような構造であり、終局的に分離・分割を標榜するバルカン主義(分割主義)とは本質的に異なると思われる。

もっとも、「異質性」とはいても、それ自体として自明のものではない。行動様式の面で異質性が顕著である場合は比較的分かりやすいが、やっかいなのは、文化的には異質性を失っていても(つまり、他の人々と同じ<主流>文化を共有している)、集団成員意識(アイデンティティ)においては「自分達は彼らとは違う」と思っている場合である。これは、「認知的範疇としてのエスニシティ」(バース、ミッチェル)あるいは「主観的定義によるエスニシティ」(イサジフ)と呼ばれる現象である。この種のエスニシティ(エスニック・アイデンティティ)が、多様な集団が遭遇する現代の都市的社会では次第に増えつつあるという。周知のように、「行動体系としてのエスニシティ」と対立する「認知的範疇としてのエスニシティ」は、「ニュー・エスニシティ」と呼ばれる現象の一つであるが、これは、ある程度文化的同化の進んだ多文化社会におけるエスニシティの特質を最もよく表わすものではないかと思われる。

4 む す び

以上述べたことを要約しつつ結論すれば次のようになろうか。

1. 1930 - 40年代に隆盛を見せた「文化変容論」は、非西洋の土着文化はいずれは西洋化の過程で消失するだろうと考えていた。北米のインディアンや移民の文化についても同様で、早晚ホスト社会の主流文化に同化され、いずれ消失するだろうとの予測が支配的であった。しかし、その後の動きは必ずしもそうはならなかった。全く無傷のままに留まることはなかったにせよ、土着文化・民族文化の強力な持続が確認されたのである。行動様式の面では、かなりの変化(伝統文化の希薄化ないし消失)が認められつつも、意識の面では依然として「アイデンティティ」を保っているというケースも見出されたし、その意味では、エスニシティは文化消失の極限的状况のもとでも少なくとも認知的範疇化の区分としては持続する力を持つ可能性が確認されたといえるであろう。

2. 1930 - 40年代に隆盛を極めた文化変容論は「強い文化」の立場からの文化「変動」理論であったのに対し、1970年代以降のエスニシティ論は、「弱い文化」の立場からの文化「持続」論であると言える。別言すれば、いずれも同じエスニシティを扱っているが、一方は「変容」(強い文化の

影響力)の側面に重点をおいた理論であり、他方は「持続」(弱い文化の持続力)という観点からの議論であるということになる。

3. 以上の変化は、エスニシティ論のパラダイムが「同化」から「異化」へと変化してきたことを意味する。ここで、「同化」(assimilation)とは、「強い文化」が支配する社会環境に合わせて、自己を修正して行く過程を意味する。また、「異化」(catabolism)とは、主流文化に同化することの反対の過程で、主流文化との差異を目だたせるような行動過程を意味する。特に、最近の(1970年代以降の)エスニシティをめぐる現象として注目されるのは、このうちの「異化」現象である。しかし、「異化」とは実際にはどんな構造をなしているのか、特に主流文化との関係はどうなっているのか、必ずしも明らかにはなっていない。「異化」にも、「絶対的異化」と「相対的異化」とがあり、前者の場合には、いわゆる「バルカン主義」に走ってしまうが、後者の場合は、ある面では、主流文化を受け入れ、別の面では民族文化に依存した生活を営むと言うような、いわゆる「バイカルチュラルリズム」の構造が考えられる。北米の「異化」現象は、カナダのケベック州のフランス系民族の独立運動を除けば、相対的異化が支配的だといえよう。

4. 従来のエスニシティ論(「同化」論、ないし「文化変容」論)のパラダイムは、①「強い文化」からの発想であったこと、②集団論からの発想であったこと、③「国家の論理」からの発想であったこと、等の諸点に特徴を持つといえるかと思う。これに対して、新しいエスニシティ論(「異化」論、ないし「文化持続」論)のパラダイムは、①「弱い文化」(少数者の文化)の自己主張であること、②認知的範疇論への考慮があること、③「国家の論理」と「個人の論理」の葛藤があること、等に特徴がある。

5. 今日のエスニシティには、(a)「行動としてのエスニシティ」という側面と、(b)「認知的範疇としてのエスニシティ」という側面の二つが少なくとも認められる。前者は多分、集団論で説明可能かと思われるが、しかし、後者は集団論では説明不可能である。それゆえ、研究においても、こうした事態に対応して、(1)社会的相互作用に関する行動レベルのエスニシティ概念と、(2)人間分類のための認知的範疇としてのエスニシティ概念との区別が必要であるように思われる。従来のエスニシティ研究では、前者のレベルの諸現象に関心が集中し、後者については十分な考慮が払われなかったが、最近のエスニシティをめぐる諸現象には、後者の概念を基礎にして考えると理解できることが多いように思われる。この意味の「エスニシティ」をめぐる現象を、「民族の復活」と呼んでいるとすれば、それなりに理解できる。

[参 考 文 献]

Barth, Fredrik (ed.) 1969 Ethnic Groups and Boundaries. Boston: Little, Brown.

Bennett, John W. (ed.) 1975 New Ethnicity: Perspectives from Ethnology. New York: West.

Glazer, Nathan and Moynihan, Daniel P. 1963 Beyond the Melting Pot: the Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians and Irish of New York City.

Cambridge, Mass. : M. I. T. Press.

Gordon, Milton M. 1964 Assimilation in American Life, New York : Oxford University Press.

Isajiw, Wsevolod W. 1974 "Definition of Ethnicity," Ethnicity 1. Toronto : The Multicultural History Society of Ontario, pp. 111-124.

Mitchell, J. C. 1974 "Perceptions of Ethnicity and Ethnic Behavior : an Empirical Exploration," in Cohen, Abner (ed.) 1974, Urban Ethnicity. London : Tavistock.

Novak, Michael 1971 The Rise of the Unmeltable Ethnics : Politics and Culture in the Seventies. New York : The Macmillan Company.

Ogubu, John U. 1978 Minority Education and Caste : The American System in Cross-Cultural Perspective. New York : Academic Press.

Park, Robert E. 1926/1950 Race and Culture, New York : Free Press.

Wirth, Louis 1928/1956 The Ghetto, University of Chicago Press.

江淵一公 1985a 「象徴体系としてのニュー・エスニシティ」江淵一公・伊藤亜人編『儀礼と象徴——文化人類学的考察——』九州大学出版会, 515 - 542 ページ。

江淵一公 1985b 「エスニック・バウンダリーとスティグマ——ニュー・エスニシティの視角——」『文化人類学2』アカデミア出版会, 20 - 33 ページ。